

Bangladesh南部避難民保健医療支援 事業評価

報告者：川瀬 佐知子（集中治療室看護係長）

派遣期間：2019年12月15日～12月26日（12日間）

派遣地：Bangladesh・Cox's Bazar

2017年8月以降ミャンマーのラカイン州から隣国Bangladesh南部に流入した避難民は約70万人。それ以前に同地に流入していた難民と合わせると、現在90万人以上がキャンプで生活をしていると言われています。日赤はその直後から現地及び国際赤十字と協力し、保険医療支援事業を行なっています。

赤十字が行う中長期支援活動は、活動計画書を元に計画的に進められます。人、物、時間がどの程度必要か、もちろんそのための予算も計上しておく必要があります。今回の派遣の目的は、現場での活動がこの計画書に沿ってどの程度進んでいるのか、修正点はないのかなど進捗状況の評価し、今後の支援計画を立てることでした。現地滞在はわずか1週間。この間に避難民キャンプやクリニックを視察し、現地スタッフやボランティア、国際赤十字スタッフへのインタビューを行います。この短期間で、しかも年末の多忙な時期に円滑に活動が進められるよう、まずは現地の日赤要員の協力を得て、キャンプ訪問の日程やインタビューの時間調整、調査内容の確認を行いました。

日赤が支援する事業は大きく二つに分かれています。一つ目はクリニックでの診療活動。もう一つはキャンプ内で健康教育を行う地域保健活動です。まずクリニックについてですが、昨年地盤を強化して新しく立て替えたこともあり、設備や患者さんの導線も整備されていました。設備のみでなく、医師、看護師、ボランティアなど一人一人の対応も丁寧で、キャンプでの受け入れもよく、患者さんからも高い評価を得ているようでした。



助産師によるビタミン剤の投与

次に地域保健活動ですが、1年半前、地域保健活動を開始した当初、避難民ボランティアの教育レベルや識字率の低さから、活動の質を問うのは難しいのではないかとの意見もありました。ほとんどのボランティアは自分の名前すら書くことができなかつたからです。しかし、今回数名のボランティアに同行したところ、以前は人前で話すことすら苦手そうにしていたボランティアが、キャンプで堂々と教育活動を行なっていました。また、応急処置セットを用いて傷の手当てをしたり、産後出血が多い産婦さんに施設を紹介するなど、特に開始当初から活動を続けているボランティアは、自信を持って生き生きと活動しており、この1年半での成長を実感しました。様々な理由から1/3程度のボランティアが入れ替わっていましたが、キャンプのために貢献しているボランティアをみて、今後も日赤として彼らの活動を支援していく意義は大きいと感じました。

避難民ボランティアによる世帯訪問、健康教育



女性には女性のボランティアが健康教育をする



キャンプ内はかなりゴミの量が減り、生活環境が整ってきたという印象を受けました。以前はどこを歩いてもゴミが多く、川の水も汚染され、異臭を放っていました。ですが、今は道や階段もでき、食料や物資の配給の列もそこまで長くはありません。子供達も大勢でサッカーやクリケットをして遊んでいます（下写真）。



一見住みやすい居住環境のように思えたため、現地ボランティアに話を伺ったところ、「住みやすくなっただけ、やっぱり自分たちの土地ではないといつも感じている。いつかは自国に戻りたいと全ての避難民が思っている」と話していました。彼らの複雑な心境を改めて察し、一日でも早く彼らが心から安心し、自分らしく生活できる日が訪れることを心から祈っています。

このような状況が、今、日本で報道されることはほとんどありません。彼らの将来はどうか、まだ不確かなことばかりです。日赤は国際赤十字や他団体と協力し、今後も活動を行っていきます。皆様のご支援、よろしく申し上げます。

※国際赤十字では、政治的・民族的背景及び避難されている方々の多様性を配慮し、「ロヒンギャ」という表現を使用しないこととしています。